



勝

林

寺

報

一

なにかを得るためには、何かを捨てなければならぬ。

昔、一遍といふえらいお坊さんは「捨ててこそ（お淨土がみえてくるのよ）」とおっしゃったとか。

そういうえば思い出したことがあります。

あれは肺ガンがかなり進行した夫と、ゆりゆるりと観音堂へのダラダラ坂道を散歩していたときのことです。

もう木枯らしが吹いて初冬がありました

から、大小いろいろな枯れ葉が私たちに降りかかるて参りました。そのときフト立ち止まつた夫が言つたことば、

「おい、見ろよ。木の葉が落ちれば落ちるほど、落ち葉した枝の向こうに、あんなに素晴らしい青空が見えるんだなー。素晴らしいものと出会うには、捨てなけりやーなー。」

最後、お念佛しながらほほえんでことぎれ

た夫を思いだし、未だに婆婆の未練の枝にしがみついていたいこのわたしを、まず夫に申し訳なくおもつたことでござります。

今まで溜め込んできた「おのれのもの」は、

なかなか自分では手放されません。

ひとり者になつたらなつたで、老いぼれればおいぼれで、「なにくそ、おまえらには負けるもんか」という意地が出てきます。

人からだんだん顧みられなくなれば成るほど無視されればされるほど、自己顯示欲と

いうのでしょうか、どこかでなんとかして田立ちたがります。

どどのつまり、年わもないかぬ幼い孫にまつわりついて、「なーおまえだけがばあちゃんの生きがいや。」なんて……。

その孫かすらも今では、「ばあちゃん、ちょっとあつち行つといて」

この間、ラジオの「深夜便」聞いていまして、どこの偉いお人が言つておらぬまし

たら、どこかの偉いお人が言つておらぬまし

この愛嬌は本来「愛敬」と書き

「アイギョウ」と読んで仏教語でした。愛しみ敬うことを意味した



「男は
度胸、女
は愛嬌」

と書かれています。

これが、愛嬌と愛想となつていつたようです。

同じ愛敬相から、愛

敬と愛相とが生まれ、

それが、愛嬌と愛想と

なつていつたようです。

が、いずれも、もとは

仏さまのお顔の相だつ

たのですね。

「はこべの家」

朗読ボランティアあすなろ（編集）

二十一日

二十二日

二十三日

二十四日

二十五日

二十六日

二十七日

二十八日

二十九日

三十日

三十一日

三十二日

三十三日

三十四日

三十五日

三十六日

三十七日

三十八日

三十九日

四十日

四十一日

四十二日

四十三日

四十四日

四十五日

四十六日

四十七日

四十八日

四十九日

五十日

五十一日

五十二日

五十三日

五十四日

五十五日

五十六日

五十七日

五十八日

五十九日

六十日

六十一日

六十二日

六十三日

六十四日

六十五日

六十六日

六十七日

六十八日

六十九日

七十日

七十一日

七十二日

七十三日

七十四日

七十五日

七十六日

七十七日

七十八日

七十九日

八十日

八十一日

八十二日

八十三日

八十四日

八十五日

八十六日

八十七日

八十八日

八十九日

九十日

九十一日

九十二日

九十三日

九十四日

九十五日

九十六日

九十七日

九十八日

九十九日

一百日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

一百零七日

一百零八日

一百零九日

一百十日

一百零一日

一百零二日

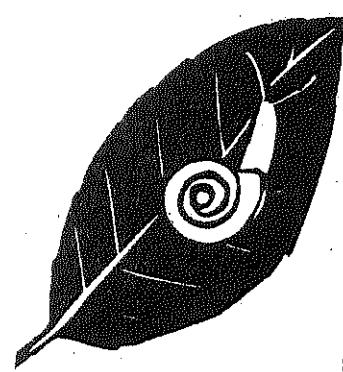
一百零三日

一百零四日

一百零五日

一百零六日

夫婦



足利孝之先生の「法話」に学んだこと

健ちゃんは、敗戦後、旧満州から両親と兄の四人で親類を頼って帰ってきました。そのとき健ちゃんは三歳か四歳でした。

お寺の近くの納屋を借りて細々と生活していました。やがて両親も亡くなり兄弟は独立して平凡ではあったが所帯をもち宝塚に住んでいた。兄弟ともにそれぞれ立派な仏壇を持ち、苦労した両親を忘れることがなく年忌年忌の法要もていねいに勤めました。

健ちゃん夫婦にも子供ができ平和な生活を営んでいたのですが、奥さんが例の膠原病という病にかかり痛みの人生がはじまります。この病気は、夜昼なく耐え切れない痛みが走ります。健ちゃんは仕事を終えると急いで帰つてきます。それが時には夜中に激痛が走ることもあることです。奥さんはどんなに疲れていても飛び起きてお湯で患部をあたため痛みをいやしてくれたと申します。

ようやく四十歳を越した頃でしょうか奥さんはとうとう力尽きました。

死の何日かまえに伺ったとき、おっしゃった言葉。「こんなに優しくしてもらつてわたしは本当に幸せでした。甘えてばかりで何のお役にもたてずに死んでいくことは辛い。本とうに感謝するばかりです。」

あれからもう何年過ぎたのだろうか。
どれだけ年月はすぎてもあの奥さんの清楚な顔とこころからのことばは忘れない。
そして考える。「夫婦」って一体何なんだろう。

ただ「すき」だけで結ばれたのではない。

たくさんの不思議な縁のなかで出会えた夫婦。その夫婦が、夫婦で暮らしながら、本当に夫婦向き合つて日々新たな出会いをもつてくらせているだろうか。

互いにソッポ向いたり顔をそらしたり:

健ちゃん夫婦を見て、わたしは改めて

思う

お互に向かい合つて話し合つて日々出会いながらくらすことも大事だけれども、むしろ、一緒に、仏様の方向を向いて生きることによって、自分のいたらなきに気づかされ、ともにわかりあえ感謝しあえる世界が開かれるのではないか。

親鸞さまご夫婦は、たとえ住まいは遠く隔ても、お念仏のなかで、互いに拝み合いながらおすこしであつたこと思い出だされたことがありました。

ふと考えた事ですが、総じて「宗教行事」の持ち方に、宗教間・宗派間で大きな違いのあることに気づきました。

1、「怒り」

タテマツル(奉る)、マツロウ(服従する)。言葉の由来からみると上下の関係です。

神や御靈に敬畏の念をもつて服従し奉仕するのが「祭り」です。

神意に沿わない(まつろわぬ穢れた)者には、当然神罰。たたりが加えられ「祓われてしまします。ノアの洪水が加えられたり、蛭子は捨てられてしまつた。

「法のもとの出会い」(彼岸会・鰐法会)。子は捨てられてしまつた。

「ことばの交換。はなし下さい」(法華講・報恩講・最勝講)

蓮如上人はことに、仏教本来のありがたはだれもが同座して「共に同心に」話し合うことで「説き教えること」を戒め、同座して「話し合い談合せよ」と諭しました。

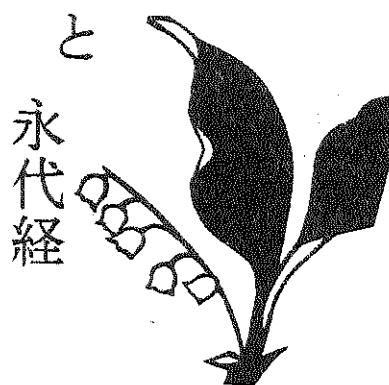
いま多くの人は、仏教・寺の役割は「葬式・法事」だと考えています。「訪らう」とこと。あらためて訪(と)い出會うことです。

「葬」は、「死体」を草原に祓い放り捨てる事です。

「とむらい」はそうではありません。「訪らう」こと。あらためて訪(と)い出會うことです。

佛教でおこなう「葬儀」は、死の穢を祓つたり、捨てたり、閉じ込めたり、また靈の祟りを鎮めたりする鎮魂・慰靈のいとなみであつてなりません。

降誕会

と
永代経

5月二十一日は宗祖親鸞さまの誕生をお祝いする「降誕会」。勝林寺ではこの日、連研終了者があつまって「勝林寺法輪会」新生発足の会を開きました。六月にはいると出石組の寺寺で「永代経」が勤まります。勝林寺では昔から7月8日9日にお勤めして参りました。

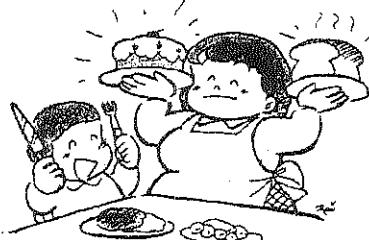
生きている

お田さん
むねさわ まさよし(因縁)

めぐ

パンも ケーキも
おもちも なんでも
作つてくれるでしょ
むつかしいものでも
あやうせんしてくれるね

ほんまによかつた
あらがとう
あかあさん



さうではなくて、「死」を縁として、その人の新しい出会いをもつことです。
まして「年回法事」は、おみのりの光りのなかで、またあたらしい出会いに会う事です。
盛大に親戚よつて勤めても「食事」会になつてはいませんか。

「ほんとうの出会い」は?

暗闇では、出来ませんね。
光りといのち(いつでもだれでもどこでもとよんでもださる名号)の如来様の「本願の中こそ日々・年々あらたな出会いがあるのではないか。」